

「土の器」

コリントの信徒への手紙二、4章7節－15節

「ところで、この宝を土の器に納めています」(7)

1、著者パウロはコリント教会で大変苦勞をします。敵対者が「キリストの十字架の福音」を受け入れなかったからです。しかし、落胆しません。回心前のパウロは律法を「落ち度のないように」頑張る生き方でしたが、今は「十字架の死」に自分本位を結び付けて自分が「死んで」、唯ひたすら「恵みに受け入れられる」生き方へと転換をしたからです。「あわれみを受けてこの務め(使徒)についている」(4:1)と言っているように、困難に出合っても道が開かれることに希望をもった生き方です。「イエスの死を体にまとっています」(4:11)というのは、自分本位に戻る危うさを持つ弱い生身を自覚していることです。ありのままの絶望的な自分が神の恵みを証ししている喜びです。だから「弱い時にこそ強い」(12:10)と言えたのです。

2、その弱さと強さ、死と生の両方を同時に表す言葉として、彼は「土の器」という言葉を用いました。もう駄目だ、と嘆く弱い面と、それでも用いられているという肯定の面です。しかし、それは独りよがり「そう思い込むこと」ではありませんでした。「わたしの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いている」(4:12)と言っているように、パウロが自らの「死」を自覚するのは、どうにもならない相手と向き合い、相手をやっつけてしまうのではなく、どうにもならない交わりの関係にこそ「死」を受け止め、相手がなお生かされていることを信じるという際どい場面においてでした。「神が・・・あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしは知っています」(4:14)と述べ、最後を「神に栄光を帰すようになるためです」と締めくくります。「土の器」は教会における彼の姿なのです。

3、「土の器」とはいい言葉です。「キリストの死」に結び付く契機となる「弱さ、脆さ、絶望的はかなさ」を表す反面、金銀ではない日常用いる土器(陶器)を表しています。その「土の器」に「宝」(「並外れて偉大な力が神のものである)を持っていうのです。注目すべきは「器」が複数形であることです。交わりのなかで発揮されている彼の様々な個性です。個性は関係のなかでの人間性です。キリスト者の作家阪田寛夫氏の作品「土の器」(芥川賞受賞1974)は、母の死を多くの人々に囲まれた証しの人生として描いた作品です。

4、多くの人々に親しまれたキルケゴールの研究者飯島宗享さんからの言葉を時折噛み締めています。肺を患い人並みには歩けない方でした。「おもむろに歩みたらずみて息をととのえれば、路傍の草木が息づきて迎えてくれる」。最近私も、骨折でバイクを止めて、ゆっくりゆっくり杖をつきつつ歩いています。道々多くの草木、大小の花々が迎えてくれて、それは私を囲む多くの人たちを想像させてくれます。